

D-4

p と q が一般規則によって形成されている条件構文についての考察

森 創摩 (筑波大学大学院)

1. はじめに

Dancygier (1993, 1998) と Dancygier and Sweetser (2005) は条件構文を分類するうえで backshift(ing) という基準を提案した。この基準は、If p, (then) q という構造を直接細分し、分類しようとするそれまでの条件文研究にはない画期的なものであると思われる。しかし、先行研究における基準・分類方法よりも多くの条件文の例とデータを精緻に扱うことのできる理論的枠組みがある。本研究の目的は、その枠組みを提示し、それにより、p と q が一般規則によって形成されていると一般に呼ばれるところの条件構文 (本研究の枠組みでは GRP 条件文と呼ぶ) についての考察を示すことである。

2. 先行研究とその問題点・不備

2.1. 先行研究: Dancygier (1998) と Dancygier and Sweetser (2005)

Dancygier (1993, 1998) (以下、D) は条件文の主要なタイプとして予測的条件文と非予測的条件文を認めている。D は、if 節が backshift されている条件文を予測的条件文、if 節が backshift されていない条件文を非予測的条件文と呼んでいる。

→ backshift とは、動詞によってマーク (mark) されている時制は動詞(句)によって実際に指示されている時間よりも以前を示すことである (D (1998: 37))。

(i) 予測的条件文 (predictive conditionals)

●backshift されている

●p と q との間に因果関係がある — このタイプの条件文は全てのタイプの条件文の中で最も中心的な用法である (Quirk et al. (1985: 1088), D and S (2005: 111))

(1) If it rains, the match will be canceled.

(2) If it rained, the match would be canceled.

(3) If it had rained, the match would have been canceled. — D (1998: 25)

●(1) の if 節は if-backshift と呼ばれている。(2) - (3) の if 節と主節の両方に見られる backshift は hypothetical backshift と呼ばれている (D (1998: 39, 49))

○(1) の主節は backshift されていない。これは例外的である (D (1998: 39))。

※Dancygier and Sweetser (2005) (以下、D & S) は、(1) のような条件節を backshifting、(2) と (3) の条件節を distancing と呼んでいる (cf. (2), (3) の条件節内の動詞形式は D & S (2005) では distanced verb form と呼ばれている)。

(ii) 非予測的条件文 (non-predictive conditionals)

●p と q は backshift されていない

→ p と q は一般規則に従っている。ここでの一般規則とは独立節を支配する (govern) 規則を指す。そして、p と q は独立節と同じように解釈される。

(4) If she is in the lobby, the plane arrived early.

(5) If she is giving the baby a bath, I'll call back later. — D (1998: 62)

○q → p という時間順序関係の例が可能 (e.g. (4))

○(4) - (5) は、話し手とは別の誰かが p が事実であると伝えたという状況・文脈で使われる

●非予測的条件文はエピステミック的条件文 (epistemic conditionals) と発話行為的条件文 (speech-act conditionals) の 2 つに下位区分される。

・エピステミック的条件文

“[T]he knowledge of p is a sufficient condition for concluding q.” (D 1998: 87)

・発話行為的条件文

“[T]he protases ... are said to guarantee a successful performance of the speech act in the apodosis”

2.2. 先行研究の問題点・不備

①先行研究では非予測的条件文の *p* と *q* は一般規則に従っていると書かれているが、予測的条件文である (1) の主節 *q* も一般規則に従っていると考えるべきである。先行研究によると、“(1) の主節は *backshift* されていない。これは例外的である” (D (1998: 39)) と述べられている。この説明の仕方はズサンと言える。

②先行研究によると、非予測的条件文には、*p* が原因、*q* がその結果であるという因果関係はないと書かれている (D (1998: 86), D and S (2005: 113, 117, 122))。しかし、以下のように、*p* が原因、*q* がその結果であるという非予測的条件文の例がある。

(6) If it's raining, we won't go to the park. (→ 'Since it's raining, we won't...') (Comrie 1986: 89)

(7) If you're leaving now, you'll be able to catch the 5 o'clock train. (Hewings 2013: 166)

(8) If you mailed the letter yesterday, it will/would be delivered tomorrow. (江川 1991: 253)

③D (1998) は非予測的条件文の仮定法を認めていないが、以下の例 (9b), (10b) に見られるように、非予測的条件文の仮定法がある (cf. D and S (2005: 124) はエピステミック条件文の仮定法 (彼女らの枠組みでは *distancing / distanced verb forms* と呼ばれる) は可能としている)。

(9) a. If Mary is late, she went to the dentist. <エピステミック的条件文> (D 1998: 86)

b. If she were home by now, the train must have arrived in time. (仮定法) (SL reviewer 提供)

(10) a. If she is in the lobby, the plane arrived early. <エピステミック的条件文> (D 1998: 62)

b. If she really had been in the lobby yesterday afternoon at three, the plane would/must have landed early. (仮定法)

先行研究では、*backshift* されているかどうかという基準で条件文を分類していたが (先行研究は最も典型的な直説法文 (最も典型的な *open condition*) と仮定法文をまとめて予測的 condition 文と扱った)、こうなると、条件構文を分類するうえで *backshift* という基準が疑われ、条件構文を分類するための基準として *backshift* とは別の基準が提案されるべきだと言える。

3. 条件構文の理論モデル (図 1 参照)

●*p* が一般規則によって形成され、*p* - *q* 間に因果連鎖関係が内在されていない条件文を GRP 条件文と呼ぶ (GRP とは “General-Rule P-clause” の略語)。

●*p* が一般規則によって形成されない条件文を NCP 条件文と呼ぶ (NCP とは “Neutral-Condition P-clause” の略語)。NCP 条件文の *p* の動詞句は単純現在時制・現在完了形・現在進行形などによって形成される。

4. GRP 条件文の分類方法

4.1. 演繹条件文、アブダクティブ条件文、そして non-DA 条件文 — 推論方法による分類

本研究は、演繹・アブダクションという論理学における推論方法によって条件文が構築されているか否かという基準で、GRP 条件文を (i) 「演繹条件文」、(ii) 「アブダクティブ条件文」、(iii) 「non-DA 条件文」 (“non-DA” とは “non-deductive and non-abductive” の略語) の 3 つに分類する。

(11) GRP 条件文

(i) 演繹に基づいて構築されている GRP 条件文 ⇒ 演繹条件文

(例) If she's divorced, (then) she's been married. (Sweetser 1990: 116)

(ii) アブダクションに基づいて構築されている GRP 条件文 ⇒ アブダクティブ条件文

(例) If he typed her thesis, (then) he loves her. (D & S 1997: 125, 2005: 117)

(iii) 演繹とアブダクションのどちらにも基づかずに構築されている GRP 条件文 ⇒ non-DA 条件文

(例) If Mr. Armani is so desperate to be seen as an artist, he should have allowed himself to be treated as one. (D & S 2005: 122)

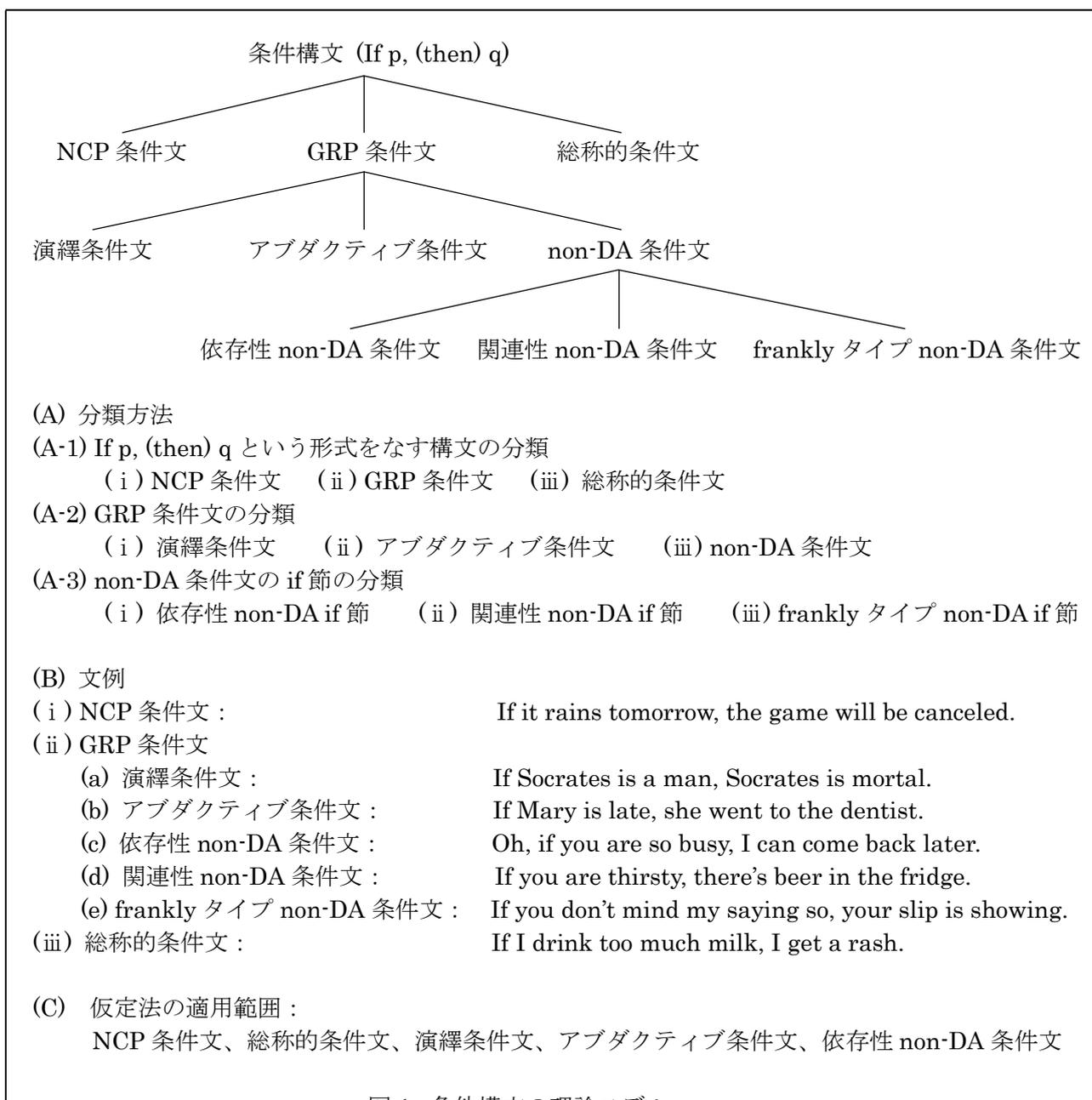


図 1: 条件構文の理論モデル

※**演繹の説明**: Hopper and Traugott (2003) によると、演繹とは、三段論法において、law を case に適用し result を予測する方法である (cf. Reilly (1970), Andersen (1973), Anttila (1989))。例えば、“All men are mortal. Socrates is a man. Therefore, Socrates is mortal.” という推論方法が演繹である。

- (12) The Law (例: All men are mortal)
 The Case (例: Socrates is a man)
 The Result (例: Socrates is mortal)

(Hopper and Traugott 2003: 42)

※**アブダクションの説明**: アブダクションという推論方法は C. S. Peirce によって提唱されたもので、(12) の law, case, result を使って説明すると、アブダクションとは、観察された result から出発し、law に頼り、case を推論するというもので、例えば、‘Socrates is dead’ という事実があるとき、この事実と ‘All men are mortal’ という law を関連させることによって ‘Socrates was a man’ と推測する方法がアブダクション推論である (Peirce 1955, Andersen 1973, Anttila 1989, Hobbs 2004, H and T 2003: 42)。

4.2. 依存性 non-DA if 節、関連性 non-DA if 節、そして frankly タイプ non-DA if 節

本研究は、non-DA 条件文の if 節を if 節のカテゴリーステータスの違いにより (A) 「frankly タイプ non-DA if 節」、(B) 「依存性 non-DA if 節」、(C) 「関連性 non-DA if 節」の 3 タイプに下位区分する。

(A) frankly タイプ non-DA if 節

- ・スタイル副詞類・スタイル離接詞と同じカテゴリーに属する if 節
- ・この名称はスタイル副詞類・スタイル離接詞の典型例である frankly にちなんでいる。

(13) frankly タイプ non-DA 条件文の例：

- a. If you don't mind my saying so, your slip is showing. (Quirk et al. 1985: 1095)
b. If I may say so, that's a crazy idea. (Sweetser 1990: 118)

(B) 依存性 non-DA if 節

- ・q を発話することと p との結びつきが non-DA 条件文の中で最も強いタイプの条件文で、このタイプの p - q 間に見られる関係性は依存性 (dependence) と呼ぶことができる。
- ・仮定法を適用可能
- ・このタイプの条件文の if 節は only で焦点化できる (つまり、if は only if で置き換え可能である)。

- (14) a. If they left at nine, they will certainly be home by midnight. (依存性 non-DA 条件文)
b. If they **had left** at nine, they **would certainly be** home by midnight.
c. They will get/be home by midnight **only if they left at nine.**

((14a, b): Leech 2004: 119-120)

(C) 関連性 non-DA if 節

- ・p - q 間の依存関係がない。
- ・仮定法の適用を受けない。
- ・q が真であることは p の真偽性によって影響されない。
- ・「関連性」とは Declerck and Reed (2001) と Bhatt and Pancheva (2006) がこのようなタイプの条件文を *relevance conditionals* と呼んでいることから来ている。
- ・関連性 non-DA if 節は、仮定法を適用できないことの他に only で焦点化できないという特徴がある。

- (15) a. If you are hungry, there are biscuits on the sideboard. (関連性 non-DA 条件文)
b. # If you **were** hungry, there **would be** biscuits on the sideboard.
c. # There are biscuits on the sideboard, **only if you are hungry.** ((15a): Austin 1961)

●non-DA 条件文の 3 つのタイプにおいて、p と q との結びつきの強さには差がある (依存性 non-DA 条件文 > 関連性 non-DA 条件文 > frankly タイプ non-DA 条件文という順) が、その強さの差は、3 タイプの non-DA if 節のカテゴリーステータスが異なっていることが原因で、non-DA if 節のカテゴリーステータスの違いの反映と言える。

5. 本研究の分類方法の正当性

(i) NCP 条件文の if 節を分裂文の焦点位置に置くことはできるが、GRP 条件文の if 節を置くことはできない。⇒ NCP 条件文の if 節のカテゴリーステータスと GRP 条件文の if 節のそれは異なっている

(16) **It is if it rains tomorrow that** the match will be cancelled.

(17) * **It is if you like her so much that** you should invite her to tea.

((16) - (17): Haegeman and Wekker 1984: 48)

(ii) NCP 条件節と non-DA 条件節の二重 if 節

●NCP 条件節は non-DA 条件節よりも主節に近い位置に生起しなければならない。

⇒ non-DA 条件節は階層構造上、NCP 条件節よりも上位の階層に位置している

- (18) a. You should invite her to tea **if you see her again if you like her so much**.
 b. * You should invite her to tea **if you like her so much if you see her again**. (B and P 2006)
- (19) a. You should meet her **if she comes tomorrow, if you love her so much**.
 b. * You should meet her, **if you love her so much if she comes tomorrow**. (Takami 1988)

(iii) 演繹条件節・アブダクティブ条件節・non-DA 条件節の二重 if 節

- (20) a. **If you ask me, if he's Italian**, he's European.
 b. * **If he's Italian, if you ask me**, he's European.
- (21) a. **If you really want to know, if he acts like that**, he is a fool. (中野 2003)
 b. * **If he acts like that, if you really want to know**, he is a fool. (ibid.)

● (20a, b) の例から、演繹条件節と non-DA 条件節の 2 つの条件節を含む文において、演繹条件節は non-DA 条件節よりも主節に近い位置に生起すると言える。⇒ 演繹条件節は non-DA 条件節よりも主節との結びつきが強く、non-DA 条件節は階層構造上、演繹条件節よりも上位の階層に位置している

● (21a, b) から、アブダクティブ条件節は non-DA 条件節よりも主節に近い位置に生起し、non-DA 条件節は統語的階層構造上、アブダクティブ条件節よりも上位の階層に位置している、と分かる。

(iv) 主節の前に then を挿入可能かどうかの統語テスト

- 依存性 non-DA 条件文では、主節の前に then の挿入は可能 (cf. (22))
- 関連性 non-DA 条件文では、主節の前に then の挿入が可能かどうかは例文により分かれる (cf. (23))
- frankly タイプ non-DA 条件文では、主節の前に then の挿入は不可能 (cf. (24))

- (22) If she is giving the baby a bath, **then** I'll call back later. <依存性 non-DA 条件文>
- (23) a. If you need any more paper, **then** there's some in the drawer. <関連性 non-DA 条件文>
 b. * If you're hungry, **then** there's some food in the fridge. (D and R 2001: 364)
- (24) * If you really want to know, **then** 4 isn't a prime number. <frankly タイプ non-DA 条件文>
 (Iatridou 1994: 182)

6. 本研究の言語分析上のメリット

① 仮定法の適用範囲がより明確になる：NCP 条件文の他に演繹条件文・アブダクティブ条件文・依存性 non-DA 条件文・総称的条件文に仮定法は適用できるが、関連性 non-DA 条件文と frankly タイプ non-DA 条件文には仮定法を適用できない。

- (25) a. If the king is bald, he has no hair. <演繹条件文> (D 1998: 79)
 b. If the king **were** bald, he **would have** no hair. <仮定法・演繹条件文>
- (26) a. If she is in the lobby now, the plane arrived early. (= (10a)) <アブダクティブ条件文>
 b. If she **were** home by now, the train **must have arrived** in time. (= (9b))
 <仮定法・アブダクティブ条件文>
- (27) a. If you really love me, you will not talk that way. <依存性 non-DA 条件文>
 b. If you really **loved** me (now), you **would not talk** that way.
 <仮定法・依存性 non-DA 条件文> (Funk 1985: 380)

② GRP 条件文は p - q 間に因果連鎖関係が内在されていない条件文であると規定することにより (第 3 節参照)、p - q 間の因果連鎖関係が実際にある例において、その因果連鎖関係は条件構文が内在的に持つものではないという説明を与えることができる。

- (28) a. If it rains tomorrow, I will be at home. <NCP 条件文>
 b. If it rains tomorrow, I will go out. <NCP 条件文>
- ・ NCP 条件文は p - q 間の因果連鎖関係を内在的に持つ構文
 - ・ q が p から予想不可能な内容のものでも、NCP 条件文では p - q 間の因果連鎖関係がある
 - ・ (18) と (19) は、GRP 条件文に p - q 間の因果連鎖関係が内在されていない証拠

③演繹条件文とアブダクティブ条件文は主観化を受けていない。

・Traugott (2010: 30) によると、(間)主観性は共時的状態 (synchronic state) を指し、(間)主観化は通時的プロセス (diachronic process) を指すもので、両者は区別されるべきである。

・演繹とアブダクションは普遍的なもので、言語に関係なく成り立つ

→ 演繹とアブダクションによって構築されている条件文の p と q が一般規則によって形成されている、というのは通言語的に成り立つと予想 (森 (2017) 参照)

④依存性 non-DA if 節は主観化を受ける。関連性 non-DA if 節は主観化を受け、間主観化されている例もある。frankly タイプ non-DA if 節は全ての例において間主観化されている (cf. Traugott (1989, 1995, 2003, 2007, 2010, 2014), Traugott and Dasher (2002))。

⇒ 表現の意味変化の方向性と一致する

・ non-/less subjective > subjective > intersubjective

・ truth-conditional > non-truth-conditional

・ scope within the proposition > scope over the proposition > scope over discourse

⑤frankly タイプ non-DA if 節は、関連性 non-DA if 節がスタイル副詞類へと脱範疇化 (deategorialization) したものであると仮定できる (Hopper (1991), Hopper and Traugott (2003), Brinton and Traugott (2005), Brinton (2008, 2017), Bybee (2015) を参照)

脱範疇化: Brinton and Traugott (2005: 107) によると、脱範疇化は再分析 (reanalysis) として知られるメカニズムの一種で、脱範疇化の例として、lose sight of の sight が挙げられている。lose the sight of や lose exceptional sights of という表現は現在ではもはやないので、lose sight of の sight はその名詞的機能の多くを失い、脱範疇化されているというのである (B and T (2005: 131))。また、B and T (2005: 22) と Brinton (2008: 58) によると、(29b, c) に見られるような I think や I guess は complement-taking noun+verb sequence から単一の不変化詞への脱範疇化を受けている。

(29) a. I think that exercise is really beneficial.

b. *I think* exercise is really beneficial.

c. Exercise is really beneficial, *I think*.

⑥if you don't mind / if I may / if you like / if you will などの表現 (Kaltenböck と Heine らの枠組みにおける挿入辞 (theticals)) は frankly タイプ non-DA if 節から生じた。

⑦いわゆるメタ言語的的条件文 (例: He trapped two mongeese, if "mongeese" is the right word. (D 1998: 104)) の if 節は、frankly タイプ non-DA 条件文に含まれる。

⑧いわゆる仮定法過去と呼ばれる条件文において p が未来時を指示する場合 (e.g. (30)) と現在時を指示する場合 (e.g. (31)) があるが、このことについて、仮定法を外して一般に直説法と呼ばれる条件文例にすると、それぞれ NCP 条件文 (e.g. (30')) と依存性 non-DA 条件文 (e.g. (31')) という全く別のタイプの条件文だったからという説明を与えることができる。

(30) If it rained tomorrow, the game would be canceled.

(30') If it rains tomorrow, the game will be canceled. <NCP 条件文>

(31) If you really loved me (now), you would not talk that way. (= (27b))

(31') If you really love me, you will not talk that way. (= (27a))<依存性 non-DA 条件文>

7. おわりに

本研究が提案する演繹条件文・アブダクティブ条件文・依存性 non-DA 条件文・関連性 non-DA 条件文・frankly タイプ non-DA 条件文という分類方法は、先行研究におけるエピステミック的條件文と発話行為的條件文という分類方法よりも多くの例とデータをきめ細かく説明することができる。